

医師免許を取得し、初期研修でさまざまな知識・スキルを習得し3年目で整形外科専攻医になると決める。その瞬間から整形外科医であり、医療スタッフや患者さんから整形外科医として認識されます。順風満帆な船出ではありますが、その分大きなプレッシャーがのしかかります。医療スタッフからは「先生、ちゃんと説明してくださいよ!」「なんでこんな患者入院させるんですか!?', 患者からは「先生、まだお若いんですね? 大丈夫ですか?」「先生、この手術は今回で何例目ですか?」、さらに上司からは「手術の勉強ちゃんとしてきたらうね?」「どうして今日やれることを今日やらないの?」など四方八方から圧をかけられる。さらにはモンスター・ペイシエントや嫌な上司から理不尽な罵声が浴びせられることもある。「理不尽に勝つ」、これはラグビー元日本代表で、日本代表監督を歴任した故平尾誠二氏の名言です。

私は1990年に整形外科医になり、すぐにラグビーのチームドクターの一員になり、平尾さんと知り合うことになりました。平尾さんとはラグビーの現場や食事会でお話しする機会が多く、その中でこの言葉の由来となるエピソードをお聞きました。高校時代の監督にまつわるエピソードです。それはそれは理不尽なことだらけで、今で言うハラスメントのオンパレードのような状況であったそうです。しかし、生徒も親も誰も何も言わなかった。監督はみんなから愛されていたんだそうです。そんな時代であったのでしょう。でもこの理不尽に晒されたことが、自分を強くしたのだと平尾さんは言うのです。理不尽な状況に置かれることが、人を成長させ、そして強くするそうです。仕事で罵声を浴びせられたり、無茶な要求をされたり、いわれのない責任を押しつけられたりして、理不尽な気持ちを抱いている人は多いかもしれません。それに対して不平不満を申し立てて、仕事を放棄することはできます。だけど、その理不尽を受けて、その理不尽に耐えて、そして乗り越えたと、人は大きく成長するのだそうです。もちろん、理不尽なことはあってはいけませんし、ハラスメントもあってはいけません。しかし、相手はそんなつもりでなくても、不快、理不尽と感ずることはたくさんあるのです。理不尽に負けるな! この理不尽に晒されることが成長につながるのです。

彼の言葉を思い出して、冷静に粛々と成長していこう。

* 神戸大学大学院医学研究科整形外科〔〒650-0017 兵庫県神戸市中央区楠町7-5-1〕Department of Orthopaedic Surgery, Kobe University Graduate School of Medicine

Author Ryosuke KURODA